

< 新人議員失敗物語 >

さて、1987年4月に市議員となり、これまでとまったく違った生活が始まった。一番戸惑ったのは市役所に行くとき「先生、先生」といわれて年配の部長、局長をはじめ市役所職員からやたらと敬語で話しかけられること。「心では何を思っているのだろうか」と不安な気持ちを抱えながら、とにかく一から勉強が始まった。

自宅に届いたマツタケ

そんな中で事件は発生した。地元のある工務店の社長さんがやってきて「建築確認申請をしているが、まだなので気をもんでいる」とのことであったので、建築指導課に足を運んで聞いてみた。「問題ありません」とのこと確認はすぐに下りた。社長さんは喜んで「先生のおかげ」といって私が留守の間に自宅までやってきてマツタケの籠を置いていった。私が夜に帰宅してみると妻が「あまりに多いので近所にもおすそ分けした」とのこと約半分がなくなっていた。

「なんで僕に黙ってそんなことをしたんだ」と言ったが後の祭り。日本共産党の議員はいかなる仕事をしても依頼者から報酬を求めないし受け取らない。これは議員に立候補する前から厳しく注意されていたことであった。もし「あの議員は届け物を受け取った」ということになれば報酬を渡すことができない人は日本共産党議員に困ったことを相談することができなくなる。

いまさらお隣に行って「マツタケを返して」とも言えず私は「あすデパートに行って同じくらいの籠を買って来い」と言いつけて翌日市役所に出かけた。帰宅して妻が買って来たマツタケの籠をもって社長さん宅を訪ね「気持ちだけお受けしておきます」とお礼をのべた。あとで聞くと約5万円の品物だったという。それ以来、どんなものが届けられようと私の留守中に家族が封を切るということは無くなった。

視察の後のフルコース

もう一つは新人議員3人（私とこくた、山中議員）の話。当時はまだワープロの活用が始まったばかりの頃で、パソコンは旧式のPC98のMSDOS型が最新式だったが、それでも企業や市役所でもコンピュータシステムの導入が推進されていた。中小企業の多い京都、その一

方で著名なIT企業も力をつけてきている京都、また京都大学をはじめシステム研究者の裾野も広い京都である。市役所も業界と組んで中小企業支援を掲げ京都産業情報センターを早くから（1978年）立ち上げていた。

「これからの京都の産業はコンピュータ抜きには語れない。現場に行ってみよう」と提案したのは私。さっそく新人3人が（新人でない議員はあまりコンピュータにはなじみがないだろうからと勝手に決めつけて）京都産業情報センター視察を企画して出かけて行った。四条烏丸下のビルに入居しているこの第3セクターの現場で幹部の説明を聞き質問もしたが、専門的なことは理解できなかったとはいえないまま視察を終えた。帰ろうとすると「隣のホテルで少しくつろがれては」と誘われていってみるとレストランに席が予約してあり、フルコースのサービスとなった。3人とも訳がわからず幹部たちと会食して市役所に帰ったが

とにかく団長には話しておこうということになったが「相手方は市役所から派遣されている幹部と第3セクター雇用のプロパー職員。いろいろな事業を起こしているところでもあり、議会であまり突っ込んだ質問などされたくなかったんだらう」という団長の話。（後々理解できたことだが、委員会で質問をすると答弁に立つのは局長、部長であり、課長以下現場の幹部などは答弁しない。そこであまり現場を掌握していない部長が＝この場合の担当は商工部長だが、専門的な質問に対して答弁に窮するといったこともしばしばある。そこで質問がでないように取り計らうのも現場職員の腕前ということになる）

現場の視察はいいが常識（たとえばコーヒー程度）以上の接待は受けるべきではないし、食事をしたのであればその場で代金を払うのがよからう、と教えられた。いまさら翌日になって代金（いくらか不明）を届けるわけにもいかずそのままになってしまったが、だからといって議会での質問を控えたわけではなかった。ただあまりにも専門的すぎてこちらの方がよく理解できなかったのが本当のところだった。

